

樹 守

事務局 ☎060 北海道札幌市中央区北3条西6丁目
北海道林務部森林整備課内

—日本樹木医会北海道支部会報—

☎011 (2) 1) 4111 内31-278

1993年5月12日発行
(平成5年) NO. 1

発行人 中内武五郎 [美唄市西4条北3丁目6-26]
編集人 館 和夫

畝 倉り干りのことば 畝



日本樹木医会北海道支部長
中内 武五郎



近年、緑化思想の浸透にともなって、郷土の宝である巨樹名木の類を愛護しようとする気運が全国的に盛り上がってきている。

このような時代風潮を背景に、林野庁は樹木医制度の発足を企画し、その意をうけた財団法人日本緑化センターによって平成3年11月に全国で76名、翌年には80名が樹木医として認定された。

その後、日本緑化センター内には日本樹木医会が設立され、各地域ブロックごとに樹木医会支部が続々と結成されて今日に至っている。道内においても在住する4名の樹木医が発起人となって、平成4年11月4日に北海道支部を発足させた。目下、志を同じくする賛助会員の募集を行って、道内における巨樹・名木・美林、緑化樹花木等の樹木保全事業の発展を図ろうとしている。

このたび創刊されたこの会報が、樹木保全に関する技術・知識を高める上で大きな力となり、また、樹木愛護の精神によって結びついた会員相互の親睦を深めるためのより所となって末永く親しまれる機関誌になるよう、心から希うしだいである。

会報命名の由来

会報の創刊にあたって、会報の名前をどうするかという問題は、正直、頭の痛い問題であった。発起人4名が精一杯の案を持ち寄った末、支部長の鶴の一声で「樹守」（きもり）という、いささか耳なれない名前に落ち着いた。辞書にもない新造語であるが、わが国には古くから「山守」、「野守」、「花守」などという奥ゆかしい言葉があるので、その例にならって命名したのである。

ともあれ、新しく生まれた会報の名前として、末ながく親しまれるように念願している。

植物とつきあって50年

中内武五郎

植物図鑑を買ってもらって

気がいたら秋田の田舎に生まれ、まわりは木と草と小鳥と小動物が住む所であった。木の名前も草の名前もわからない子供心にも、庭にあるサクラやウメ、ツガなどは何となく覚えた。「木と草とどこが違うの」ときいてもだれも教えてくれない。植物好きの私に母が10才の頃植物図鑑を買ってきてくれた。植物には科、属、種があり、バラに似た花をつけるものはバラ科で、サクラならばサクラ属エゾヤマザクラというように、種に分かれているというようなことがわかった。

山に行ってはカタクリ、スマレというような花の名を覚えた。学校にも図鑑を持って行って、一つでも多くの植物を覚えるようにした。植物の種類がこんなにも沢山あることを知ったのは驚きだった。

そのうちに木と草はどこがちがうのだろうか、また、春に咲く花、夏に咲く花とか、花が咲いたらどうして種子をつけるのだろうか、花の色には赤や黄、白、紫のほかどんな色があるのだろうかなどと考えるようになった。

子供が使う図鑑だから難しいことは書いていない。もっといろいろのことが書いてある植物図鑑をみつけたが、2円30銭もするので、せせと小遣いをためてやっと買ったのが思い出される。

それからは学名や和名、それをつけた人のこととか、花は夜のうちにフロリゲンというホルモンをつくって芽に送るので咲くとか、花粉には若干ながら毒性があるとか、木には雄木と雌木があるものもあるとか、葉や幹、根には呼吸している気孔があるなど、大変勉強になった。

何といっても植物の先生は母であった。

植物を楽しくするいろいろの道具

顕微鏡で木の肌、葉、根、花粉まで400倍から1500倍にして見た。その他、昆虫から微生物まで拡大してみることができ、極めて楽しかった。丸くて黄色い数の子のような花粉、葉の中にある光合成のための工場である葉緑体や根の先端にある根冠など今まで肉眼で見えなかったものが見えた。根毛も「はるさめ」のように見えた。30倍のルーペがあれば現場ではずいぶん役に立つ。土壌にしても根の発達するところは根を掘らなくてもよく、検土器で80cmまでの層がわかる。また、土壌の中のイオン濃度も今は簡単なPH測定器があるので便利である。その他沢山の道具があり、いろいろのことが今までより正確にわかるようになったのも樹木医にとって大きな味方である。



カタクリ

植物美術病院を開いたわけ

役人生活は終りまで勤めないことが私の考えでしたから、定年の3年前に卒業させてもらった。友

童とは良いもので、「植物治療院をやったら」とアドバイスされた。その後、中内植物美術病院を開院したが、HBCの放送に出演したとき、田村ディレクターが「中内でなく北海道にしたら」ということで今の北海道植物美術病院にした。多くの人から「植物はわかるが美術をつけた理由は」ときかれる。「それは私は絵を描くからで、植物も絵も美しい方がよいという簡単な意味です」と答えることにしている。

私が植物美術病院をはじめ、もう15年になる。たった15年で植物の管理も手入れも、また、取りまく環境も大きく変わった。

植物についてあったいろいろのこと

考えてみると渡島から根室、宗谷ほか道内の各支庁管内で行かなかったところはない。古い日誌から拾ってみたところ次のような数字が出てきた。

渡島支庁管内	65回	網走支庁管内	89回	上川支庁管内	99回
檜山支庁管内	26回	根室支庁管内	22回	宗谷支庁管内	21回
日高支庁管内	41回	後志支庁管内	44回	釧路支庁管内	30回
空知支庁管内	157回	胆振支庁管内	42回	十勝支庁管内	80回
留萌支庁管内	32回	石狩支庁管内	43回	合計	791回



791回の中には植物の講演、植物の管理手入れ（主として剪定、植栽など）、植物の増殖法（接ぎ木、さし木、種まき）であった。この数字は樹木医になるまでのもので、中にはゴルフ場の樹木や芝についてのアドバイスは入っていないが、それらを入れると回数はかなり増える。

このごろは技術相談の内容も変わってきた。とりあげられる樹種も、肥料も農薬も次から次へと新しいものが出てきたせいともいえる。

樹木医になってからとこれから

樹木医になってから旭川の梅、美瑛のエゾヤマザクラ、厚真のハルニレとニホンカラマツ、黒松内のスギとブナ、風連のイチイ、美唄のイチイ、岩見沢のハルニレ、北村のドロノキなど、多くの樹木の治療を手がけた。

最近、あちこちの樹木が弱ってきたように見えるがその原因はなんだろうか。

穴があいている木の治療法、農薬（主として除草剤）の使い方、剪定の時期とその程度、土壌と樹種の適合性などの指導を求められる場合が多いので、調査してみると季節風による気象害が意外に多かった。土壌については粘土地に植えているため、酸性による害と水分の不足などがみられた。これから先は各市町村にある巨木、珍木など貴重木の診断治療に全力をあげ、正しく答えを出して行きたい。私ばかりでなく、樹木医全員がそう考えていますので、何なりとご相談ください。

（北海道植物美術病院：樹木医）

平成4年度に行われた道内における樹木医活動の成果から、特徴的な事例を、次
いくつか紹介することにしたい。

[厚岸町国泰寺境内の老桜樹の診断]

小田島 悦

1、現況

天保元年場所請負人山田文右衛門が、国泰寺に大伽藍堂の布設建設に際し、奥州石巻から移植したと伝えられる樹齢160年を越えるエゾヤマザクラの老木。厚岸町の国泰寺境内に生育している。地形的には盤羅山(77.5m)の北側山麓にあり、小沢の出会いの平坦地である。厚岸湾のすぐ近くに位置しているが、南側、西側が山に囲まれ生育期間中に直接潮風を受ける危険性は少ないと思われる。

周囲の状況は図-1のとおり、南側は約10mで、厚岸神社境内の急傾斜地となっており、斜面にはエゾヤマザクラが植栽されている。北側は3mで砂利敷の道路である。樹木の形態は別表のとおり。

2、診断所見

腐朽を除き病虫害はとくに見られない。海霧の発生が多く湿度の高い海岸地方に特有の地衣類が樹幹や枝に大量に付着している。梢端のほとんどが枯死し、枝の伸長量も極端に短く葉も小さい。枯枝が多く葉の発生少なく、枝葉の密度が疎など樹勢が著しく衰退し枯死寸前である。

20年近い前から幹腐れが進行しており、図-2に示すとおり、太枝の大部分はすでに腐朽しており、樹幹部も地表から1.8mの太枝の分岐部には、ヨモギ、イチイの稚苗が生育していた。この分岐部から樹幹部に鉄棒を挿入したが1m貫入した。恐らく地際近くまで腐朽が進行しているものと思われる。樹幹の地上高90cmの位置で、腐朽の激しい南面と太枝の生きている東面で生長錐による樹幹断面の腐朽状況を調査したが、健全部は東面部で約10cm、南面部では約2cmにすぎず木質内部は末期腐朽の段階になっている。

腐朽菌の種類は形成された子実体を取り去られていて不明であるが、国泰寺の住職が付近のエゾヤマザクラに形成されていた子実体(ツガサルノコシカケ)と同様の物が形成されていたと言われており、ツガサルノコシカケと思われる。

ツガサルノコシカケは、マツ、モミ、トウヒ類等、針葉樹の心材部に立方状褐色腐朽を起こす菌であるが、ときには広葉樹にも寄生する強力な木材腐朽菌である。

調査木から南西方向へ3.9mの地点と、東側へ3.2mの地点の2箇所ですら調査を行った。道路の南側のサクラの植栽されている箇所全体が60~70cm位一段高くなっている。現地の説明では20数年前に全体に盛土したとのことであり、樹勢衰退、腐朽進行の誘因になったと思われる。

土性は角礫の多い砂質土壌で透水性良好である。地表から20cm位迄の土壌はかなり堅くなっている。根量が少ないが土盛りのため下層と客土部分の2段根になっていると考えられる。

3、処方・対策

腐朽の進行を止めるためには、大規模な外科手術が必要であるが、太枝のほとんどが腐朽し樹幹の

健全部もほとんどない手遅れ状態であり、技術的にも非常に難しく、樹形も極端に切り詰めた形になり、経費も多額になる。現状のままでの延命対策としてはつぎの点が必要と思われる。

①樹幹部への雨水の浸入を阻止する。②危険な枯枝の除去 ③樹木にとって樹勢に最も大きく影響する因子は根の活動である。調査箇所の土壌は森林土壌と異なり、長期間落葉落枝の還元が不十分で有機物の供給量が少なく、さらに車両や観光客の入りこみによる踏圧のため地表から20cm位迄の表層がかなり堅くなっている。このため踏圧防止のための立入禁止柵をできるだけ広く設置し、樹冠幅の広さに細根発生促進のため土壌の表層を膨軟にして有機物の供給（バーク堆肥等）が重要。また有機質肥料も施用する。長く伸びている太枝は比較的健全で着葉量も多い大切な枝なので暴風、積雪害にえて完全な支柱をたてる。

いずれにしても、老桜樹の寿命も限られているので、早急に二代目の苗木養成（接木、挿し木、実生）を進める必要がある。

4、まとめ

道内のエゾヤマザクラでは最も高齢な部類に属する貴重木であるが、現状では手遅れで治療は非常に困難である。

樹木の形態

樹 高	枝下高	胸高直径	幹 周
10.0 m	1.8 m	88 cm	277 cm

枝張りE	枝張りW	枝張りS	枝張りN
9.8 m	5.5 m	3.5 m	4.2 m

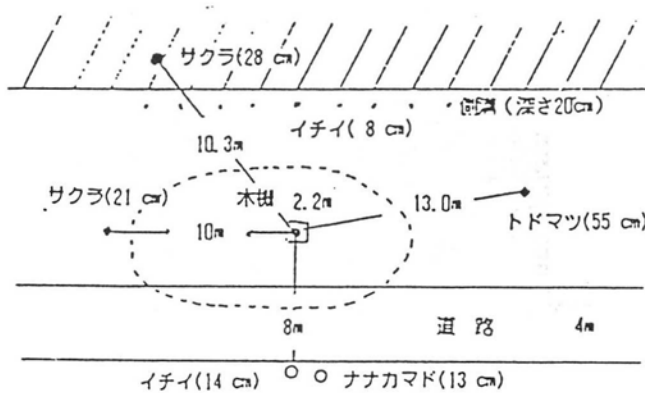
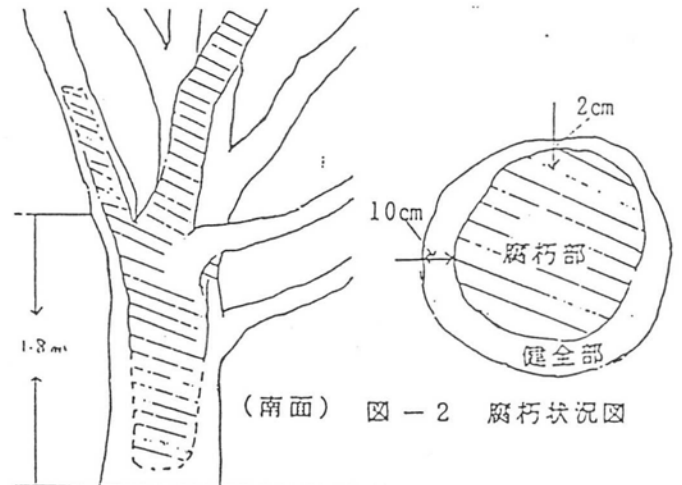


図-1 周囲状況図



(南面) 図-2 腐朽状況図

風倒木発生の予知技術

齋藤 晶

樹木は老朽化にともなって、幹枝の内外に腐朽が生じ、空洞、陥没、裂傷などのほか穿孔性害虫などが寄生する。風倒被害は、このような罹病患部から発生する。

この調査は、樹幹材部の腐朽程度が風倒被害に与える影響を把握するため、国道5号線沿いのマツ並木において、風力に応じて発生した過去の被害事例を参考にしながら風倒被害の危険性がある樹を選定し、その予知を試みたものである。

1、マツ並木の由来

函館市桔梗町から七飯町峠下に至る約13kmのマツ並木は、樹齢約130年といわれ、明治初期に函館奉行が佐渡から種子をもとめ、七飯官園で養苗し植栽したと記録されている。この並木は観賞価値が高く、威厳を誇る風致林として知られ、道の「環境緑地保全地区」に指定されているほか「日本の道100選」にも選ばれ、近年はまた、道路の日を記念して公募・命名された「赤松街道」という愛称によって市民や観光客に親しまれている。

2、並木の現況

現在の並木の総本数は約1500本で、アカマツが93%を占め、樹齢100年以上と推定されるものは、53%となっている。この沿道の樹木は道路工事や排ガスの影響、車両による損傷、市街化による悪影響などから生育環境が年々制限され、一部の幹枝には腐朽が見られるようになっている。

3、維持管理

通常の管理は、強風による枝条や氷の落下を防ぐためそれらを除去すること、下草刈り、害虫駆除などである。伐採は原則として完全に枯死したものについて行う。その他、家屋や果樹園などに近接し過ぎたもの、幹枝の一部が枯損し、風倒による二次災害が予測される場合などについても観察結果に基づいて順次行なう。跡地に補植することはむろんである。伐採予定木の中には幹枝の一部に腐朽が見られるが、成育状況は全体的には健全で十分な緑を保っているものが多い。そのため樹木の外観だけから判断して伐採木をきめることは適当ではなく、緑保存の重要性などを考慮した場合、可能なかぎり延命策を講ずる必要がある。



写真- 腐朽箇所を除去したアカマツ
(テープ印は生長錐挿入箇所)

4、最近の風倒事例

平成2年11月30日の夜半から早朝にかけて、渡島半島に上陸した温帯性低気圧(28.8m/s)は、国道5号線の沿線に多くの風倒被害をもたらした。風倒木の多くは幹の表

面に若干の腐朽が見られるものの、樹の姿の外面にはまったく被害が見られなかった。しかし、風倒木の折損部の腐朽状況を見ると、幹断面と比較した腐朽率は35-46%であった。

5、腐朽患部の拡散調査

外傷面からの腐朽菌の侵入などによって、患部の腐朽がどの程度拡散しているかを把握する必要がある。幹材内部は外部からの直接観察ができないため、腐朽が予測される場所に成長錐を揉みこみ、幹材コアを採取して材内の腐朽部と健全部を測定すると共に腐朽断面の模式図を描いた。すなわち採取したコアの健全部と腐朽部の長さを読み取り、円面積計算式 ($A = \pi r^2$) によって腐朽部・健全部の面積をそれぞれに求め、樹冠内部の腐朽状況を推定した。

これらの模式図と計算値から樹冠内部の腐朽程度を考察し、平成2年11月に発生した風倒事例とビューフォート風力階級表から風倒被害発生の危険度を予知し、また、被害を未然に回避する方策として樹冠部の減量、支柱による補強、さらには腐朽患部の治療技術等について検討した(下表参照)。

表-2 ビューフォート風速基準とマツ並木の風倒被害の事例

階級	風速 m/s	腐朽程度 %	外観	被害の発生部	被害状況	備 考
7	13.9~17.1	70以上	異常	幹、根株、枝 葉等に病虫害 の痕跡がみら れるもの。	幹折れ、根返 り、枝折れ、 その他による 被害等。	風で枝葉落下が多い(強風)
8	17.2~20.7	60	〳			風で枝葉落下が多い(疾強風)
9	20.8~24.4	50	〳			階級7~8の被害を含む(大強風)
10	※24.5~28.4	※ 40	〳			階級7~9の被害を含む(全強風)
11	※28.5~32.6	※ 30	正常			階級7~10の被害を含む(暴風)
12	32.7~36.7	30以下	〳			正常木を含む階級7~11の被害(台風)
13	36.8~41.4				洞爺丸台風(15号)規模の台風	

※~平成2年11月30~12月1日の暴風によるマツ並木(国道5号線)の被害状況

6、今後の課題

人体は高齢化が進むにつれ、次第に各所の機能が減退する。樹木も同様に老朽化にともなって幹、枝葉、根系などに腐朽・衰弱症状が現れ、やがて枯死に至る。人間は疾患の状態を伝達できるほか、体内の検査にはX線やCTスキャナー、超音波、内視鏡など近代医療機材を使用することによって診断や治療が可能になっている。しかし、樹木の場合は症状を訴えることができず、樹体内部の観察機器も未開発であることから、今後、名木・巨樹などの老朽木に対して診断治療が可能な器材の開発が急務といえる。

(北海道立林業試験場道南支場：樹木医)

最近、官公庁等によって実施されている樹木保全関係の施策や事業の中から樹木医の活動と関係の深いものを選んで、その内容、傾向等について紹介する。

巨樹名木の現況と対策

—平成4年度巨樹名木林等戸籍調査の結果から—

館 和夫

平成4年度から林野庁の企画により、3カ年計画で各都道府県に所在する「巨樹名木林等戸籍調査」が実施されている。

本道では北海道林務部みどり対策室が窓口になって、約150本の名木類の調査が予定されており、このほど初年度分として15樹種25本（1カ所1本として表示）の名木の樹勢診断結果が報告された。

樹形、枝の伸長量、幹・大枝の状況、梢端・枝端の枯損、枝葉の密度、葉の形・大きさ・色、萌芽期、開花時期などを、活力の程度に応じて4段階（健全：1、最も不良：4）に与点、活力指数を算出し、樹勢を◎、○、×の3段階に区分した結果は下表のとおりで、25本中、◎が15本で60%、○が6本で24%、×が4本で16%であった。これらを樹種別にみると針葉樹類に活力度のやや勝っているものが多かった。

表 道内の巨樹・名木の活力度 (1992)

樹 種	調査本数	活力度	樹 種	調査本数	活力度
イチョウ	1	◎	カツラ	2	◎○
イチイ	2	◎○	エゾヤマザクラ	1	×
アカマツ	2	◎◎	サトザクラ	1	○
クロマツ	4	◎◎◎◎	ウメ	1	○
グイマツ	2	◎◎	スモモ	1	×
スギ	2	◎○	トチノキ	1	○
クリ	2	××	ツバキ	1	◎
ケヤキ	2	◎◎	合 計	25本	

注) 活力指数：(活力評価項目別評価値合計÷活力調査項目数)

1.00~1.75=◎、1.76~2.50=○、2.51以上=×



写真- 樹勢健全な函館八幡宮の大榎



写真- 衰退著しい平取義経神社の大栗

今回の調査木の内訳は、渡島管内12本、檜山管内6本、釧路管内4本、日高・石狩・空知管内各1本で、神社仏閣に植えられているものが多く、神木として樹体をなるべく傷付けまいとするためか折々に必要な手入れが最小限にしか行われない傾向がみられた。

衰退の原因は多くの場合複合的であるが、これらの樹木自体が老齢に達していることのほか、生立地の土壌や周辺環境に、舗装、踏圧、切取り盛土、工作物の設置等、何らかの変更が加えられたり、また、枝折れなどによる損傷部分から枝幹に腐朽菌が侵入することなどによって枯損が進行しているものが多い。

郷土の宝であるこれらの巨樹名木については、今後とも時機を失することなく生立条件の整備（保護柵・支柱の設置、客土、排水、施肥・耕うん等）に努めるとともに、病害虫の防除、各種の外科手術、後継樹の育成などの総合的な対策が図られるよう、関係者一同、力をあわせて行きたいものである。

（北海道林務部森林整備課：樹木医）

新刊書のご案内

平成4年7月 (財)日本緑化センター発行

樹木医の手引き 定価5000円(消費税込み)

〒107 東京都港区赤坂1-9-13 三会堂ビル

TEL 03 (3585) 3561 Fax 03 (3582) 7714



江別市付近の緑化樹・林木苗畑の害虫

館 和 夫

昨年の6月中旬、石狩支庁林務課主催の森林保護研修会があり、江別市近郊のR苗畑（2.2ha）を見せていただく機会を得た。養成されている苗木は、ナナカマド、サクラ類、モンタナマツがそれぞれ5000本規模で最も多く、ニオイヒバ、アカエゾマツが約3000本ずつでそれに次ぎ、以下プラタナスが1500本、カツラ、イチイ、メギ、ツツジ・シャクナゲ類、キタゴヨウなどが500～1000本であった。それらの苗木や、周辺の植え溜めなどに植えられた緑化樹の害虫と、その発生の密度は下記のごとくである。

樹種	害虫の種名	虫態	加害形態	発生密度	加害場所
ナナカマド	オビカレハ	老熟幼虫	食葉	(+)	苗畑
サクラ類	マイマイガ	同上	食葉	(+)	"
	ササキコブアブラムシ	-	虫えい	(+)	"
	チャバネフユエダシャク	中齢幼虫	食葉	(+)	"
	ヒメシロモンドクガ	同上	食葉	(+)	"
プラタナス	クワゴマダラヒトリ	同上	食葉	(+)	"
ツツジ・	ツツジゲンバウムシ	-	吸汁	(++)	"
シャクナゲ類	ドクガ	中齢幼虫	食葉	(+)	"
キタゴヨウ	マツカサアブラ	-	吸汁	(+)	"
モンタナマツ	マツツマアカシムシ	中齢幼虫	穿孔	(++)	"
クサツゲ	ツゲノメイガ	老熟幼虫	食葉	(++)	植溜め
ハルニレ	ニレメンチュウ	-	虫えい	(+)	"

これらのほかにも警戒すべき害虫としてイチイの葉につくイヌガヤワタカイガラムシやアオキシロカイガラムシ、イチイやライラックの根を食うナガチャコガネ、ニオイヒバから数年前に道内では初めて発見されたヒノキカワモグリガ、シラカバの害虫として知られるシラカバノクロホシハムグリハバチなど歓迎されない害虫がたくさんいるので、栽培者は油断なく適期防除を行って、品質の良い苗木を供給されるよう改めて注意を喚起したい。

会員の皆様からの原稿を募ります！

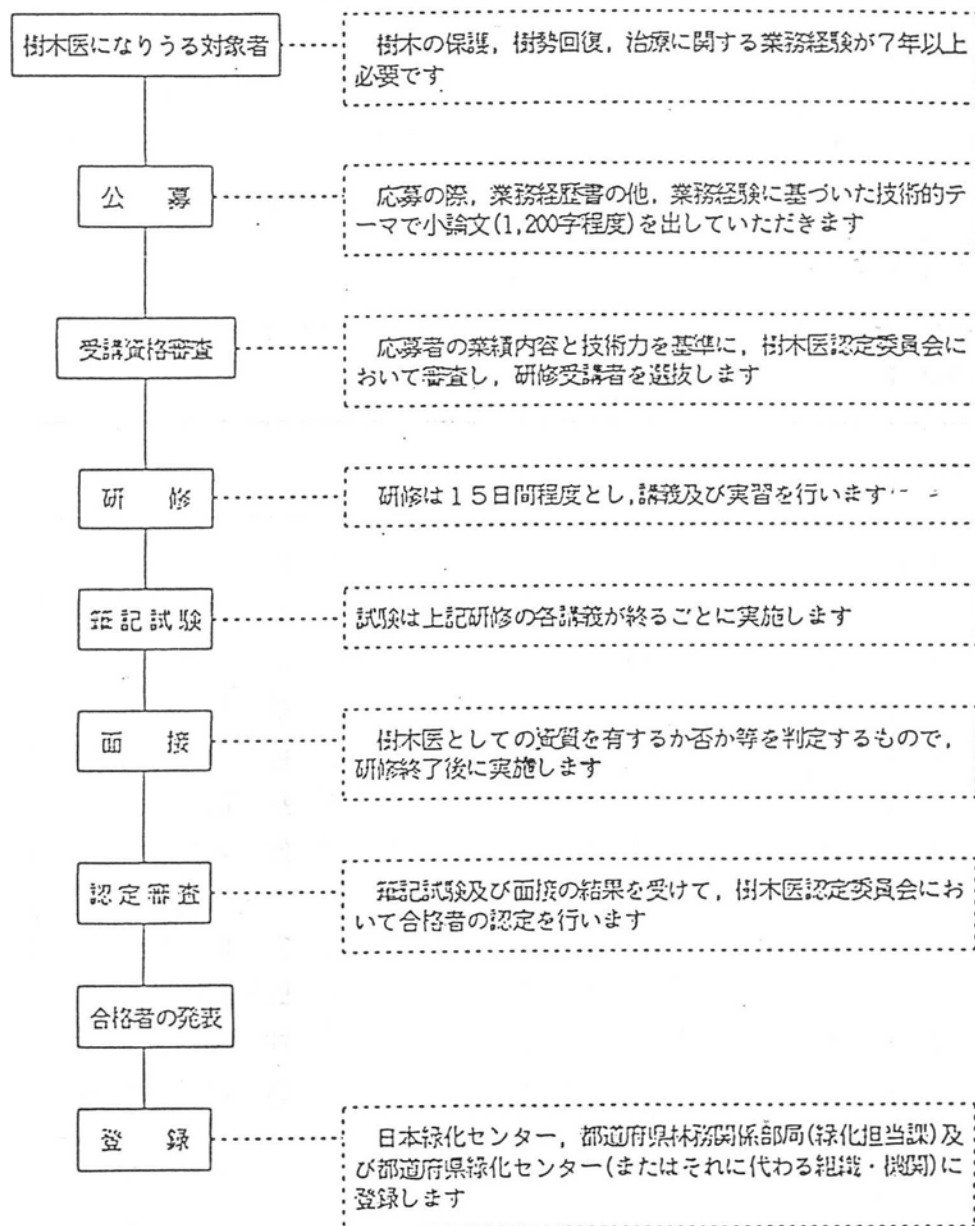
「樹守」は、会員皆様のものです。樹木の保全、保護管理にかんする話題や研究成果など、どんな小さな事でも結構ですから編集部（事務局）へお寄せ下さい。

原稿には原則としてA4判横書き原稿用紙を用い、当用漢字・楷書書き。ワープロ原稿はA4判・1ページ当り38列、1行当り40字にまとめて下されば助かります。なお、編集の都合上、長さや表現を適宜補整することがありますが、ご了承下さい。

平成3年度から発足した樹木医認定制度は本年度も実施される予定で、具体的な日程は未定であるが、昨年までの実施要領から推測すると、本年も6月ないし7月には受験希望者の募集が行われ、受験資格・業績・小論文等の審査の後、合格者は10月頃筑波で2週間におよぶ研修を受け、試験・面接の関門を経て、樹木医の仲間入りをはたすことになりそうである。

会員の皆様には、なるべく北海道地区からの受験希望者が増加するよう、樹木医認定制度の周知徹底をお願いしたい。

〔樹木医になるまでの流れ〕



研修応募資格

業務経験が通算して7年以上あることが条件です。業務経験とは樹木の保護、樹勢回復治療に関する研究あるいは実務に従事した期間です。例えば、①大学および研究所の教職員、研究員（林学、農学、造園学、園芸学等）②国、地方公共団体の農林、緑化関係職員③農林業・緑化関係の公益法人、会社の役職員④農林高等学校⑤①～④のOB、⑥造園業、植木生産業、農業、林業等を営むもの⑦その他（知識技能の優れた者）等のうち、樹木医としてふさわしい実績のある者が対象となります。

研修内容

研修内容はおおむね下表のとおりです。（一部変更あり）

科 目	内 容	科 目	内 容
樹木の生理・生態	講 義	大気汚染害の診断と対策	講 義
農薬の基礎知識	〃	土壌障害の診断と対策	講義と実習
病害の診断と防除	講義と実習	樹幹と根系の処理技術	〃
虫害の診断と防除	〃	後継樹の保護・育成・遺伝子保存	〃
獣害の診断と防除	講 義	樹木の総合診断	〃
気象害の診断と対策	〃		

都道府県別の樹木医数

	1991	1992	計		1991	1992	計		1991	1992	計		1991	1992	計
北海道	4	-	4	東 京	5	5	10	滋 賀	1	1	2	香 川	1	-	1
青 森	2	4	6	神奈川	1	2	3	京 都	1	5	6	愛 媛	1	-	1
岩 手	3	-	3	新 潟	2	3	5	大 阪	3	2	5	高 知	1	1	2
宮 城	2	1	3	富 山	2	1	3	兵 庫	1	2	3	福 岡	2	2	4
秋 田	1	3	4	石 川	2	1	3	奈 良	2	-	2	佐 賀	1	1	2
山 形	2	2	4	福 井	1	-	1	和歌山	1	-	1	長 崎	1	-	1
福 島	2	2	4	山 梨	1	4	5	鳥 取	1	2	3	熊 本	1	3	4
茨 城	3(1)	4	7	長 野	1	2	3	島 根	1	-	1	大 分	1	2	3
栃 木	3	4	7	岐 阜	1	2	3	岡 山	2	1	3	宮 崎	2	-	2
群 馬	1	-	1	静 岡	2	3	5	広 島	-	4	4	鹿 児 島	1	1	2
埼 玉	2	1	3	愛 知	1	4	5	山 口	-	1	1	沖 縄	1	-	1
千 葉	3	1	4	三 重	2	1	3	徳 島	1	2	3	合 計	76(1)	80	156

注) 括弧内は認定後死亡者で内数。

参考書のご紹介

本の名前	著 者	発行所	発行年	価 格 (円)
樹木大図説 (I II III)	上原敬二	有明書房	1972	(50,000)
原色日本植物図鑑 (木本編 I II)	北村・村田	保育社	1971, '79	10,000
日本植物誌 (顕花編)	大井・北村	至文堂	1983	(15,000)
北海道主要樹木図鑑	宮部金吾ほか	北大図書刊行会	1913('83)	5,000
樹木根系図説	苅住 昇	誠文堂新光社	1979	50,000
北海道樹木図鑑	佐藤孝夫	亜璃西社	1990	2,800
モミジ・カエデ	大井次三郎ほか	誠文堂新光社	1968	1,200
シャクナゲ・ツツジ	東京山草会	誠文堂新光社	1969	1,200
原色日本菌類図鑑 (正統)	今関・本郷	保育社	1957, '65	(10,000)
北海道きのこ図鑑	高橋郁雄	亜璃西社	1991	2,800
庭木・花木・林木の病害	小林享夫	養賢堂	1988	8,300
植物病原菌学	徳永芳雄	博友社	-	5,800
原色昆虫大図鑑 (I II III)	朝比奈ほか	北隆館	1959-'65	(50,000)
原色樹木病虫害図鑑	奥野孝夫ほか	保育社	1977	4,600
日本蛾類幼虫図鑑 (上下)	一色周知ほか	保育社	1965, '69	9,000
緑化木・林木の害虫	小林富士雄ほか	養賢堂	1988	8,300
森林美学	新島善直	成美堂	1918	9,500
農薬便覧	香月、後藤ほか	誠文堂新光社	1987	5,000
農薬毒性辞典	植村振作ほか	三省堂	-	2,000
野生の水	立松和平	スコラ	-	1,400

*これらの本は発行元のほか、札幌市内の丸善、紀ノ国屋などで取扱っています。
 価格は1993年現在、購入しようとする場合の概算価格（一部については推定価格）です。

新刊書のご紹介

— 森林基金造成記念出版 — 平成5年2月刊

北海道林務部監修 (社)北海道国土緑化推進委員会編集・発行

北海道の巨樹・名木 頒価2800円(送料別)

〒063 札幌市中央区北4条西5丁目 林業会館内

TEL 011 (261) 9022 Fax (番号共通)

本学会の会報発行と広告募集のお知らせ

日本樹木医会（本部）では、目下、会報「TREE DOCTOR」創刊の準備を進めている。会報はB5判、56ページ程度で内容は①樹木医座談会②技術情報③樹木医Q&A④樹木医会の動き⑤支部だより⑥診断・治療の機器資材紹介などである。

また、会報発行のための協賛広告も募集中で、その種類は下記のとおりである。

広告の種類：

- | | | | | |
|----------|-----|-------|----------|---------------------|
| ①表紙2、3、4 | カラー | 1ページ | ¥150,000 | (天地22.0cm×左右15.0cm) |
| ②記事中 | | 1ページ | ¥50,000 | (サイズ 同上) |
| ③記事中 | | 1/2 " | ¥30,000 | (天地10.0cm×左右14.5cm) |
| ④記事中 | | 1/8 " | ¥10,000 | (天地4.5cm×左右7.0cm) |

— 樹木医認定制度・刊行物等についてのお問い合わせは下記へどうぞ —

財団法人 日本緑化センター

〒107 東京都港区赤坂1-9-13 三会堂ビル

TEL 03 (3585) 3561 FAX 03 (3582) 7714

編集後記

今日こそは今日こそはと思いながら、日々の勤めに追われて、つい会報の発行が延び延びになってしまったことを、まずお詫びしたい。



(写真一 左から中内、小田島、斎藤、館)

世人の大きな期待をになって発足した樹木医制度であるだけに、ヘマは許されないという責任感と、試行錯誤の現実のはざままで揺れ動く気持ちに耐えながら、この一年余り努めてきたというのが大方の樹木医たちの実感ではあるまいか。

道内の4人の樹木医（写真）も賛助会員の皆様と手をたずさえながらさらに研鑽を積み、少しでも多くの郷土の緑を保全できる「樹守」になれるよう頑張りますので、今後とも何とぞよろしくお願い致します。